

## 恵まれない人を脳は無視できない？

人には「最も恵まれない人」の境遇に自然に関心を向けるクセがあり、それにかかわる脳部位もあることがわかったと、亀田達也・東京大教授（実験心理学）らのグループが発表した。経済格差の問題を人がどう認識しているのかにかかわる科学的知見で、米科学アカデミー紀要（電子版）に掲載された。

亀田さんらは大学生67人を対象に、見知らぬ3人にお金を分配するなどの想定で実験を実施。様々な選択肢から分配法を繰り返し選ばせ、関心と判断の傾向を探った。

例えば、3人に500円ずつ▽1人は1300円で、残る2人は600円ずつ▽2人は1600円、1人は80円だけ——などの例を提示。金額の格差が少ない分配法を選ぶのか、最低金額が低すぎないパターンを探るか、格差があっても全体の総額が大きい配り方を選ぶのか、などを見た。

その結果、総額や平等性、最低金額のいずれを重視するかで

### お金分配実験…最低額に最大の関心

最終判断は分かれたものの、どの分配法を志向する集団でも、最大の関心が払われていたのは「最低金額はいくらか」だった。特殊な方法を使って、視線や行動のパターンから、学生らが注意を向ける先と関心の持ち方の移り変わりを分析。望ましい分け方に関する意見の違いを超えて、最も恵まれない状態に最大の注意を払うことが明らかになったという。

最低金額の状況をチェックする時に脳のどの部位が反応したかを血流で調べたところ、立場を置き換えて思考する際に使われる「右側頭頭頂接合部」が関係することも判明した。

亀田さんは「今回の実験で、人間には好むと好まざるとにかかわらず、不遇な状態に自然に反応してしまう共通の神経回路がある可能性を示せた。米国のウォール街占拠やサンダース現象など、格差を批判する動きがなぜ世界中で起き、どういう社会を作ればいいのかを考える際の基礎になるのでは」という。